

私が見たアメリカ大学の リベラルアーツとしての自然科学教育

文系学生に対して、実験を含む科目を設置し大規模に実施している大学は、国内には慶應義塾の他はほとんど例がないことが独自の調査でわかっている。これが、海外の大学ではどうか、特にアメリカでの、教養としての自然科学教育の現状について情報を得たいと思う

日時： 1月 14 日 (土) 10 :00 ~ 12 :00

場所： 日吉キャンパス 第二校舎 1階 214 教室

講演]安積 徹 (国際教養大学特任教授、ミネソタ州立大学秋田校元教授、
東北大学理学部名誉教授 (専門は物理化学)、
2003 年ルイジアナ州立大学客員教授)

同会]大場 茂 (文学部化学教室教授)

=====

講演要旨：

1年ほど前、アメリカの大学にしばらく滞在して教育の有様を観察する機会があったが、私が過ごした40年前とは大きく変わっていたことに少なからず驚いた。たとえば、基礎教育に対する教師の熱意が昔とは大違いであるし、学生への締め付けも昔に比べてはるかに厳しくなっていた。

アメリカ大学のリベラルアーツ教育の、日本と大きく異なるところは、すべての学生が将来の専門に関係なく同じ講義を受講するという点にあると思う。たとえば、General Physics は、将来物理の研究者または大学の教授になろうという学生も、将来ビジネスマンになろうとしている学生も全く同じ教室で同じ講義を受ける。高校のレベルは日本に比べて高いとはいえないので、かなりやさしいところから入るが、すぐに難しくなり、non-major の学生にここまでやるのかとびっくりするほどである。国際教養大学の同僚の英語の教師達の化学に対する造詣の深さに驚くが、このような教養教育のおかげだということを実感している。